

## ベトナムの文化交流の諸相

Various Aspects of Influences by East Asian Cultures  
on Vietnamese Culture

### 未成道男

①はじめに

②文化交流の概略

③宗教の変容

④宗教の地域的差異

⑤おわりに

#### 【論文要旨】

10年前、ベトナムに初めて訪れた時の第一印象は、それまで社会人類学的な調査をした台湾、韓国、中国大陸、沖縄、あるいは日本、いずれの経験も呼び起こしてくれる、非常に多彩な性格を具えた文化であり社会であるということであった。比嘉教授からベトナムについて20分話さないかとお誘いを受けた時、気軽に引き受けたが、ベトナムの文化交流は、非常に長い歴史と多彩な広がりを持ち、口頭では無理なので映像を主として発表する。

1章はベトナムをめぐる文化交流の概略、2章は外来宗教と土着宗教の関係として、「童筆」の例、3章は宗教の地域的差異と変容の例として土地神を取り上げる。

第1章で文化交流を概観すると、日越関係では様々な類似が見られるが、朱印船交易の果たした役割が大きく、現在でも遊びに使われているカードの図柄に当時の日本の風俗が描かれている。日韓関係でも、民画、亭という集会所、年齢秩序、儒教儀礼など数多くの類似が認められ、中国を介在しない直接の交流関係も存在していた。日琉関係では、コイン模様の紙銭、姉妹の靈力、洗骨、3人のかまと神など様々な共通性を見いだすことができ、朱印交易の前には琉球船が盛んに交易をしていた。中越関係は、和戦両様の直接的関係が二千年以上続き、影響の及ばない所を見いだす方が難しいが、第2章で儒教の浸透の下に独自のシャーマン的要素が発現した「童筆」を、第3章で一見中国風の土地神が独自の要素が認められ、経済成長に伴い南のタイプがハノイなどの都市に入り始めていることを指摘した。中国的なモデルや単純な伝播論でベトナムを見ると、殆どの現象は説明できそうだが、それだけではベトナム文化の持つ多様性を十分理解できないだけでなく、奥に潜むベトナム固有の要素を看過することになる。

社会人類学的手法がベトナム理解に貢献できる点は、定点観察に基づき歴史をも含めた全体像を見るということであろう。